yumenoboueisen

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｙｕｍｅｎｏｂｏｕｅｉｓｅｎ

【Ｎコード】
Ｎ０４８１Ｈ

【作者名】
猫離脱

【あらすじ】
タイトルは夢の防衛線です。仕事とは何か。働くこととは何か。を考えてます。

夢の防衛線

雪は降り続けた。自由が地におつ涙、泣いているのは自由を妨げた地で代わりにはじけた涙のすべてを受け止めた。
　我が足を踏み込む大地はない。大地などどこにもない。蓋をしてしまう。
悲しみは止むがこの大地を覆う。
　モグラが道に迷い化け物の巣穴に入りこんだ。化け物はモグラを隅に追い込み妙な音のする白い光の膜でモグラをつかみ上げ光に近いところへ持ち出した。
　モグラは行き先など見なかった。ただ下を目指し穴を掘った。幕は破れ外にとびだした。空気は冷たくあたりはまぶしく、突き当りまで進んだ。土のにおいがするところへたどり着き、爪が掛けたか心配する間もなくまずは潜った。
　恐ろしい化け物がいるものだ。

　眠りはどの日についているのか、昨日か今日か明日か。
朝も7時になって起きてくるなんて、一日が始まって7時間もたっている。たしか一日は２４時間で、起きるとすでに1日の3分の1も費やしている。
　一日の最初の眠りがありそれは夢を見るためだ。その仕事を終える。起きてきて、その夢に向かうべきだと思う。その夢の意図するところを目指すべきだと思う。
　自分の代わりにストーブが付き、テレビがしゃべり、パソコンが起動する。
願いがかなった。会社がつぶれるという夢。

炭酸水を補給しに近くの自動販売機にいく。
もやもやを解決させるはじけたじゅーす。

1．スタート

智晃は考えていた。日がめくられる時間だった。日が変わる瞬間は一瞬だった。使い込んだ腕時計は何回とこの瞬間をたどっていた。こいつはわかっている。一日の始まりに寝ている必要がどこにある。それは目的のないしるしだ。暇なのか。やることはないのか。疲れているのか。慣習を打ち破る時だった。
日を裏切り、月を睨み、世と直接目を合わせない。奇跡の道を歩いている。
ただ智晃はそこまではたどり着いたのだが、４時までがんばって少し休もうと思ったのだった。７時に目を覚ました。仕事のためだった。
まじめに繰り返して１０年を経過していた。
半年前に企業は解雇通告を従業員にしなければいけないらしい。
それゆえに智晃は考えていたのだが、飲み込まれていた。
当面の給与は保証されるらしい。退職金も大丈夫そうだ。噂で情報を得ていた。ただ半年後の解雇は決定で誰もそうでないらしいとは言わなかった。

智晃は自分に何ができるか考えていた。自分の特徴らしきものを探していた。就職試験で言うありきたりの答えはそのままこれまでの１０年を示しているように感じた。言いたくもない言葉を言わされて自分の心に鍵をかけさせる。無意識にだ。それに対しての怒りもない。ただその言葉を履行してきただけだ。学校の就職対策や面談練習で学んだ通りに言葉を覚え、使う。自分には不釣り合いであり、心にもない言葉が契約書でありそれに甘んじた。

物作りの喜びとかなんとか、御社の地域貢献云々、一生懸命がんばりたいと思います。とか言ったっけか。
先日、車の運転中、首のない鳩が道路をさまよっていた。自分はその鳩を避けたがいっそ轢くべきだったと考える。あの鳩はどうしてああなったか、どうしてあそこにいるのか、首がなくともまだどうして歩けるのか。
いっそ轢くべきだった。智晃はその光景を何度もイメージして後ろを振り返らなかった。

2. 夢

夢はよく見る。目を覚ます前の時がそうだと今はいえる。目を覚まし二度寝の時もよく夢を見る。そんなときの1分は数十分にも感じる。
逆立ちしながら泳ぐ魚に乗る。という事を夢で言われた。それは面白いことなのだそうだ。それがぼくの特徴なのだと考える。逆立ちしているのが魚なのか、乗り手なのかを考えたが、普通乗り手が逆立ちするのは考えられないのに、どちらだろうと考えるということは、乗り手が逆立ちしているのだろう。逆立ちしながら、泳ぐ魚に乗る。
どうやって、。
だがしかし、手掛かりを得た気になった。
夢は続く。
「せいがんがいる」
ふたりの男女、女は小太りのおばさん、後ろ姿しか見えない。男は細長い感じの男、山高帽。後ろ姿しか見えない。
「せいがんだ」
どうやらぼくのことを言っているらしい。
せいがん。

老人のベットに向かい挨拶をする。
迎えに来たのだろうか。
あと2日。
ぼくはうつぶせで寝ている。
サンとシはぼくを遠くからみている。水平線の向こうへ音もなく遠ざかっていく。
あっと、思うと隣にいた。
向こうがというより自分が移動したようだった。
なにをともいわず、一緒に歩いていた。
まわりがみたらぼくらはゆらゆら白い光に覆われた陽炎のように見えるだろうと感じた。
きたかったのだろう。サンがいい。
シはそんなときもあるわといった。
シを正面から見る機会があった。まともな人間にはみえなかった。
絵画のようであり陶器のようでもあった。気のいいおばちゃんは表面で描かれているに過ぎないのだ。
サンは。サンにはまともには近づきがたかった。
思ったことは、とシがいい。
あなたもそう見えるのよ、続けた。
サンを見るには早すぎる。
ぼくはなにかそう思い。シを見たことを少し後悔していた。
いずれ時期が来れば会うだろうとサンはいい。サンの後ろシの横顔の後ろをかすかに眺める位置に留まった。
ふたりはときどきぼくのそばからいなくなりまたもどった。もどるとまた歩き出す。
なぜいなくなったあと自分のところへもどってくるのかわからなかったが、サンが教えてくれた。おまえがわれわれといたいからだろう。
そういわれるとそう思われた。

ゆらゆらといくなか見えるのは飛行機でみえる雲の集まった上をいくみたいだった。下が厚い雲の集まりで中は雲の中身。遠くも厚い雲が見えていて暗くなったり明るくなったりする。
最初は夕日や朝日や夜に感じられたが、それだけではないようだった。

3・・・（シとの出会い）

ただのおっさんにもみえた。着ているものはださかった。一昔前の格好でどこでそれ売ってんのってかんじ。オレとヒデ棒はただ街をうろついていただけだった。それを二人は見回りといっていたので、へんてこな奴が最近ではいりしているのに気づくのにわけなかった。
俺らがスタバで飯を食うとしている脇にそっと忍び寄って
「なあ」
と話しかけられた。
オレとヒデ棒はどっちが対応するべきか一瞬で判断し、いつもはオレだから今日はヒデ棒だという息を察知したヒデ棒が答えるのを聞いていた。
オレは完全に無視したふりを決め込んだ。
「なんですか」
「突然なんだけど仕事しない」
「は」
「仕事ってなんですか」
うざくなりそうなら切ってやんないといけないな。
「コピーロボットって知ってるか」
唐突な言い方だ。
オレは知っていた。ヒデ棒は知らないだろうと思う。
「いえ」

ヒデ棒は引き気味だ。
おっさんを判断しかねている。
「カタカナ語は反則だね」
話しは続いたしまだまだつづける気持ちがあるようだったのでオレはそういって向き直った。
で、ようするにゲームみたいなもんでこっちにリスクはないって訳だ。
ヒデ棒は理解した。
オレも理解した。
ショッピングモール内の気温はそれでも安定していた。
扉もなく窓もない店から出て、男はすこし猫背で本屋の方へ歩いていき、オレもそこへいきたかったのを辞めて外へ出た。
「なんかわかんねえ」
「しらけるし」
「デーちゃんどうするよ」
ヒデ棒が聞いてくるが、
「いんじゃね」
「ひまだしさ」
「こうやって逃げ道はあるわけだし、彼ここら辺の人間じゃあないだろ」
「社会性は低そうだし、他に大勢とつるんでる風には見えない」
「ってことは彼にだけ気をつけてればいいって訳か」
ヒデ棒わかってるじゃないか。
「だな」
「お前、清美には話すんじゃないぞ」
「ん、ああ」
オレはだめだと思ったが、いちおう付け足した。
「今は、まだだ。」
「その内話せ」
時間の問題だ。

あまりごちゃごちゃさせたくない。
そんな気がしただけだ。
「で、どうする」
「帰ろう」

なんでかおっさんの話に乗るなんて、話し興味があったとしか考えられない。おっさんなんて考えられない。あと5分も話したら気が変わっていただろう。次に含みをもたせるというか、悪い気もそこそこに良い気持ちにもさせないもぞもぞとした明日を伺う感じ。まさに今の自分たちの姿以外の姿を鏡で見せられた感じだった。

4・・・（サンについて）

気にも留めないでいたのだが気になりだしたのはいつからだったろう。
たまたまと言うらしい。
職場の先輩の工藤さんが言うにはイヤでもあるわと言うことだった。
だってここらじゃ皆ここに買い物に来るんだもの気にしてちゃいられないわ。
だれが何かってどんな嗜好性があって、どんな生活どんな夕食、朝食、皆見えてくるわよ。だから目が回るくらい忙しい方がいいの。
客がごったがえす夕時が一番好きな時間帯だそうだ。工藤さんは。
あれこれ考える暇が亡くなるのだという、そのどさくさに紛れて客は通り過ぎていく、馴染みだろうが一見だろうが。

「ねえ　聞いてる」

でーちゃんと別れて帰り、手付け金でゲームソフトを買い、車にガ

ソリンをつめ、清美が飲みたいといっていたシャンパンを買ってアパートに帰った。
清美は夕食をつくっていた。
オレは清美に食わしてもらっていた。おままごともやってみるのもいいかもねと親は言っていたが空いているアパートの部屋に住まわしてくれた。

清美が何で地元のスーパーに就職口を決めたかについては今は考えたくなかった。
オレがなんでふらふらしてるのかも考えたくなかった。
とりあえず回ってる気がしたのでどこかしこに動いていける気はしていた。
このままではないのだ。
会社に入った奴はそこが終点のような気がした。もちろん何ヶ月もすれば辞めただの聞こえてくるだろう。大学に行った奴もいる。とりあえず就職は氷河期なのだそうだ。
それにかこつけられるあんたは幸せだねとのことだ。

「ああ、きいてる　きいてる　それよりこれうまいよ」
「こっちくれば」

回ってると思っていた。間違いなく、人生の主役はオレで、人生は動いているのだ、毎日こうしている間にも大きく戻れないところまで進んでいる。

「大きな歯車がさ」
清美が突然言い出してびっくりした。
「大きな歯車がさごろごろころがって、ふみつぶされないように隙間にはいるのね」
なにをいってんだろうと思う。

「私得意なのよねなぜか、私以外のものも人もつぶされて」
清美を見る。
「何、真剣な顔して」
「夢よ夢」
「ほら、あのパチンコ屋のＣＭ」
「あれのせいよ」
「ヒデだってあの歯車のりてーなんていってたじゃない」
シャンパンの泡はまだ沸いていた。
音を聞きたくて耳を近づけて清美がそばに来たのに気づかなかった。

5・・・無限の箱へ

今日は不安の海に漂うボートに帆を張らせビギナーズラックの風をびゅんびゅん吹かせてやりました。
ボートは一週間もすれば当たり前な道をたどり、わずかですが貴重な積み荷を積んで戻ってくるでしょう。
そうしたら安心と信頼でそれを買い戻してやらなければいけません。
もう三回も回ればひと月です。早いものですね。
三回も繰り出せば油断も生まれることですが、一人は気づくでしょう。彼には少し別の分け前を少しづつ取らせます。もうひとりは輪廻のワープを繰り返し安定操業行わせます。
生活基盤が生まれます。子供ができることになるかもしれません。
望みは叶う。社長になった。なれるもんだ。
いろいろと信じるものがありすぎてひとつくらいにしぼったらこうなった。信じればかなうよ。一つ一つやり遂げてみる。今はこれで、進んでいく。先が見えるまで進む。迷わず。
進む。次が間逆に進むことになるとか考えない。
見えるものだけが見える。魔法のようなうさんくさい真実。技なのか芸術と呼んでいいものかわからない。

食べるものにも気を遣う。必要なものだけを食べる。摂取といって方が最近は良いのかもしれない。食べたいものだけでいい。必要なものだけでいい。食べたいときだけでいい。
間違いなく食べ物は体をつくる。体を動かす栄養になっている。
当たり前か、当たり前。
当たり前。何度も繰り返す。
これも魔法だ。
芸術だ。
ものを食べると言うこと。
見落としがちだ。
当たり前だ。
そんなの昔は気づきもしない。
そういうところに最近は怒りを感じ始めていることだけは確かだった。
むらむらきてふっと人を使い捨てみたいに扱いたいとをも思う。
自分もこんな立場なるんだなと感じる。
向きが変わった。規模は小さくとも見える景色で気持ちも変わるものだ。
時間に追われ、はいずりまわって疲れて眠る夢をみた。最後は幸せを感じていた。
今は逆だ。
何でか昔は背いていた。真っ向から反対にだ。成功に背をむける。
ＴＶなんかではしゃいでいる都会の若者が憎い。外連味がない。成功が当たり前だと思っている。ゴミをゴミとしてみる。だれがあいつらを勝たせたかって言えばあいつら自身だ。
疑いもなく進んでいる。
その勝利の特急が宇宙まで伸びて決して帰ってこないことを祈る。

6

大輔の住む地域には一般的にその地域にはふさわしくないような大きな企業が一つあり、その企業の城下町と長年言われてきた。高校を卒業して就職先はその企業だし、その関連の子会社だったりする。卒業して2ヶ月。ヒデ棒とふらふらしてきた。
就職ができなかった。
この街の就職システムは暗黙の了解となっていることには高校3年の秋に知らされた。
えっ大ちゃん知らなかったの。とヒデ棒に言われた。
胃に詰め込んだ焼きそばパンが胸に痛かった。
うすうすは知っていても知らなかった。大ちゃんなんでも知ってそうだからとヒデ棒は言った。当たり前のこととかしらなかったりするんだよね。やっぱいいコンビだわ、オレら。
高校2年の夏休みが終わったあたりからだろうか、力を付けてくる奴がいた。3年になると、大学を目指す奴と地元就職を目指す奴らが別れて、クラスなども分けられる。
これまで、ぱっとしなかった奴が台頭してきたりしていた。
大学に向かう奴は自然とおとなしくなる。
そういや、オレらの組に入らないかなんて言われたこともあった。
まずいいや、なんて答えてたけど、あんなんが以外に人生の分かれ道だったりするんだろう。
高校には毎年、その企業の枠があり、人数は決められていた。
就職相談などで先生達の指導を受けるわけだが、会社の希望人数に対して志望人数は同数。
ヒデ棒によれば、親分がいてその下の副長が2人、副長の下のチーフが2人で計5人。この5人は役員と呼ばれる。他は下っ端１０人。しかし下っ端といえども一流の企業にはいるのだからそのメンツでは下っ端でも、子会社には顔が利く。下請けのB社があり、C社があり、D社がある。すでに決まっている。ピラミッドができている。Cに入ることが決まっている奴は間違ってもB社を志望してはいけ

ない。Ｂの奴がＡという風にもいけない。
そのかわり就職率は１００％なのだ。

男女差はどうしてもあるが、女性にしてもそうだ。Ａ会社の女性枠はちょうど5名。これ理由わかる。とヒデ棒が言う。さあ、男の何分の何は最低確保しなければならないんじゃないの大企業だし。
ヒデ棒は笑って答える。
ぶー。
違います。役員の嫁さんの数です。
役員。嫁。
ああ、彼女の事か。
ヒデ、すげえな。
だろ、デーちゃん。
世の中すげえよ。
世の中すごいね、デーちゃん。
笑っちゃうよ。
だね。
歴史の授業もまんざらじゃないな。
でさ、オレらはどうなのよ、ヒデ。
それがさ、なーんもつてないもんね。
笑っちゃうくらい。
オレとヒデはおもしろくてたまらなかった。
新種の発見をしたみたいだった。
顕微鏡の中の出来事を見ているようだった。
顔をあげて笑いあったのを思い出す。
それはそれはすばらしい青空と開放感がオレらを真っ白な雲のように校舎の屋上の大地に貼り付けさせてくれた。
空と垂直に交わった。
空と垂直に、目線が、。
それからどうしたっけ。

たしか、
一人で帰った。
うちへ帰っても誰もいない。進路についてどうなるか、わからない。
何を相談すべきかもわからない。
デーちゃんどうしようかといわれてもオレも困る。
ヒデ棒の家は結構な祖父の代からの地主で父親は早くに亡くなったが、大企業の城下町、他地域から勤めに来る社員に提供するアパート経営はヒデ棒の母の堅実な稼ぎだった。
うちはといえば男親が生き残った。父親は役人。税務署と言うところの役人なのだそうだ。
母は生きている顔を見たことがない。父は結構な転勤を繰り返す仕事らしく、自分も一所にいたためしがない。だからかかなり醒めているところがあるといわれる。基本3年。高校の3年が同じ地域であったのは幸いだろう。だが完全に個別化していて家族という関係がないように感じる。が、特に不満はない。親父には感謝している。高校の3年間が同じ場所で過ごせるのも何らかの細工があったと大輔は見ている。
ヒデ棒とは長い間片親で過ごしてきた境遇では一緒だ。そして高校1年から一緒だ。
どうしようか。地に足付けてという感覚がない。
結婚して、子供ができて、家建てて、その土地に住まうのがここの一般的なならいのようだ。そしてその態勢はできている。大企業は役所よりも強い。小さな街では盤石の体制を敷いていた。
それ故にそれからあぶれたものは出て行くしかないんだろうかと思う。
なにげに関係している。車屋も、飲食店も、網の目に張り巡らされている情報網。
何かイヤだった。
でもそれは若いからなのだろう。現実はそうではない。
CだろうがDだろうが生きていくのだ。

そして長い月日をかけてあるいは世代を超えてランクの上位を目指す。
そのための努力が美しいものから汚いものまでやり方はさまざまだ。
美しいものが見たい。
ぎゃーぎゃーうるさいのは好きじゃない。
空と垂直に。
（あおむけで魚の夢をみたのにつながる）

7．メモ帳

１００円ショップやコンビニで見るようなメモ帳だったが、こんなに書き込まれているのは見たことがなかった。それはすべて重要なことのように大輔には思われた。
氏は戸村と名乗った。本当かどうかはあまり関係ない。仮にＴ氏と言うことにしよう。
言われたサイトは簡単に見つかり、ログインする。メモのとおりＩＤとパスワードを入力。
口座には２００万。言われたとおり。
取引の開始。
は、明日にしようと携帯の画面を閉じた。
そのとたん電話が鳴り。氏からだと思ったがそうではなかった。
麻里子だった。
久しぶり、元気などとありきたりの会話をかわす。
仕事どうと聞いてみた。
不況みたいだし、でも関係ないかあの企業だしな。
どお楽しい。
まあまあかな、なんとはなく答えた。
ドライブ。うん。ああ。わかった。
携帯財布メモ帳住所靴服。もてるものありったけもって家を出た。

麻里子はいい女になったんだと、まったく女は化ける。数ヶ月でがらりと変わる。でもオレは学校の時から変わっていったのを知っていた。
あいつとやったのかときいたら悲しそうな顔をしていた。
それでもうつむかずオレを見ていた。
麻里子はファイブの女になった。
とにかくそういう運命なのだ。ファイブの女になることが運命なのだ。
オレがファイブになっててもならなくともだ。
高校んとき、もうトップの人はオレなんか眼中になかった。雲の上の存在で目すら光らせない。どろんとした塊がはって歩いている感じ。
セカンドの人がなぜかオレを気にかけてくれてそのせいかは知らないがなぜか周りにも気を遣われる存在になっていた。
けれどもやっぱり時が差し迫り、オレはいろんなところからねらわれるようになってそれはそれはうんざりするくらいだった。だから麻里子もタイミングが悪いんだと言い訳するオレは麻里子の細い横顔を見る。
麻里子の毎日が一週間が一ヶ月が一年が見える。
ときどき制限速度を超えて走り、時々追い越しをしたりして麻里子の車は海岸線を走っていた。ちょうど助手席のオレは絶好の景観を楽しめたところだ。
オレに組に入らないかと誘いがあったのは秋の終わりだった。とうていそんなことが起こりうる時機ではなかった。もう派閥の態勢は決まっているのだ。
オレとヒデ棒だけがうろうろDとCあるいは県外就職だったり逆転の大学受験を受けるだったり全方位的な夢見てた。
オレはそれを断り、その後、麻里子から告白され断り、組の奴らにいやがらせされ、特にひどかったのが今の麻里子の彼氏のファイブだった。

最初にオレにセカンドの使いとして来たのが今のファイブで、くそおもしろくない顔をしていたのを覚えている。なんでお前なんかがいきなりファイブなんだよ、勇次さんの（これはセカンドの名前だ）顔つぶすなよ。と、組の定例会だかの前の幹部会に呼ばれてファイブとして認めるん云々。勇二さんもなんであいつをよこしたのかあいつがたまたま来たのかオレを見たかったのかともかく、すっぽかしたオレは顔をつぶしたんだろう。
勇二さんすみません。
で、麻里子はファイブとつきあってるという噂がながれ、オレは直接ではないがファイブの指示の元、セカンドの庇護がなくなり、散々だったよ。影ではファイブが笑ってたしな。

だからオレは奴をファイブと呼ぶ。
いまでもだ。
まあ、もう関係なくなってせいせいしているが、麻里子はファイブの彼女だ。
今もそうなのだろう。卒業してまだほんの数ヶ月だ。
ファイブは元気してるの。
同じ会社だろ。
同棲とか、まさかもう結婚したとか、の話し。

麻里子は綺麗になったと誰もがいうものだった。麻里とオレの関係を知ってるものは少ない。そうでない奴は、麻里とオレが話しているのを見ると麻里ちゃん紹介してよなんていうもんだった。実際そうなんだろう。オレもそう思う。麻里は美人だ。
ほんと手が付けられない。昔も今も。
オレは好きか嫌いかもわからない。

「ねえ」
麻里子が停車帯に車を止め、天気は良く風はそよいでいた。コンク

リートの堤防に腰掛け海はいつもより深い青色だった。
大ちゃんさ怖いんだよね、大ちゃんさずっと強い人だなあって思ってたけどそうじゃないんだよね。弱いよ。
弱いの隠すのうまいだけ。
だからまだそんなところいる。そこで何しているの。何を探しているの。
ごめんね、こんなこというつもりだっったんじゃないんだ。あれなんだっけ忘れちゃった。
まあいっか、。天気もいいしね。
堤防をまっすぐ歩いていく麻里がいた。麻里は遠ざかっていくのだが、それは逃げていくのとは別だった。時間がたっていくのとも別だった。

なにを言いだすんだろう。恐ろしい。弱っている虫の息の根を止めた。
オレは暴かれた弱さを堅持してファイブと言い張り、何にもできない弱さを認めて麻里子と別れた。
デーちゃんは次の段階に行かないうちから次の段階について考えて次の段階の作業をはじめてる、ひとりで。それ長所だし短所。ヒデ棒の言葉がよぎる。
オレの心ここにあらず。それはオレも知っていたし、麻里もしってんだろう。
だからいつも、聞いてっていわれる。
話す前から、聞いてって言われていた。麻里はそういっていた。
オレはもう次の作業で忙しい。
麻里じゃなくて、麻里子よ。
オレ聞いてないんじゃあないんだ。
でも、みな、遠くにいるように話す。独り言のように話す。
オレは気の小さい動物で皆が怖くてさ、安心できないんだ。常に逃げ道を確保するのに躍起なんだ。その場の空気になじめないんだ。

土地にどっかり根をはるのってすごいよな。芯がないっていうか根無しで、別れるのも先読みさ、どうせ一人でやっていかないとって、でもさ一人で生きていけないのよなんて麻里子の言い分もわかるんだ。たぶん誰よりも。
オレの二つの川が落ち着く先を探してるんだ。おれはそれを探してるんだ。
一人になって思いつく。麻里子に言ってやりたかった。
なんだ、お前だってオレの前にいないじゃないのよ、オレが言うときいないじゃないのよ。
聞いてよ。聞いてくれよ。
オレの考えがまとまったのは、車のドアが閉められ、じゃあねといって別れてうらうら自宅までの道のりを歩いて一人部屋に残されてやるすべもなく、明日の目覚ましの時間を確認した後だった。

8.

デーちゃんは相変わらず。
でもそこがデーちゃんのかっこいいところさ。短所でもあるしね。
清美。だから、デーちゃんのことはオレにまかせとけって、麻里ちゃんにも心配すんなって言っておいてよ。
デーちゃんは一人が好きだけどさ、オレはデーちゃんの事好きだしさ。
やくなよお前。
デーちゃんもそこで麻里ちゃんにちゅーしてやるとかさ、押し倒すくらいの勇気欲しいよね。
でも、デーちゃんやれるからやらないんだよね。デーちゃんそういう人、おれ知ってるもんね。
デーちゃん怖いよ、やるときはどっからでも行くしね、なんでもや

っちゃうから、順番とかも無視だし、本とはやった後の後付ってデーちゃん大得意だと思うよ、でもそれしないんだよね、デーちゃんそれしたとき恥ずかしそうだもん、ちょっとしたことならそれですむけどさ、大事なことなら自己嫌悪もひどいんだろうね。それは見たことないしみせないけどさ。
わかるよ。

あっやべ、でーちゃんから電話だ。
オレ行くわ、
うん、今からいける
まだ、見てない。
うん。
わかった。

デーちゃんがオレのも確認して言うには２００万と２００万で計４００万だった。
メモにあるとおりのパスワードが合えば取引はできる。ただし、お金を引き出すのは無理らしい。
つまりはほんとだって事。
あれから向こうからは電話もメールもとりあえずはないので、今から早速始めようと思うとデーちゃんは言った。
そうだなこういうのはどういうところでやるのがいいんだろとデーちゃんが聞いてきたからオレはこう答えたよ。
だから、デーちゃんはトイレにこもってる。
四角い箱の四角い箱の四角い画面。
ファミレスのトイレで携帯株取引を行っているデーちゃん。
次はお前の番だからなと、デーちゃんはコンビニのやはりトイレを取引の場所に指定してきた。４×４×４×４×２かな、なんて言いながら。

第一回目の取引は終了。
最初はやり方を覚えようとの事なんで、金額を設定して買ってみた。
まずはこれが明日にはどうなるか確かめようという話しで打ち合わせた。
デイトレードなんて言葉も聞くくらいだから1日おきかと思っていたら1日で何回も取引をすることも可能なようだ。
次の日、朝デーちゃんからのメールで目を覚まし確認する、デーちゃんは1万円オレのは３００円＋だった。
デーちゃんはそれを売り払い、これで約1万。オレのは保留となった。
それから一週間繰り返した。
購入は一日1銘柄限定、売却は＋分のみの決めで、オレもデーちゃんも最終的には＋だった。
デーちゃん5万オレ3万。保有株式デーちゃん2。オレ3。
一週間で2人で8万。一ヶ月で約３０。
大きなところを当てれば桁は上がる。
元での２００を気にしないのなら一気に２００万銘柄で勝負もできる。
戸村氏からメールで2週間後に会おうという話しだったのでそれまではこのままのルールで続けようと打ち合わせた。
負けも勝ちも返せる額に抑える話はついていた。
デーちゃんが言うには戸村氏はこっちの状況を確認はできていると言うことだった。
それはパスワードやＩＤは自分のものだから確認はできるのだ。
で、おっちゃんなんか言ってたときくと特に、ということだった。
なに、もおおっさんからおっちゃんに格上げかなんてデーちゃんに言われそうだが、デーちゃんはもう戸村さんだ。
デーちゃんは言う。
オレが細かく稼ぐ。お前が一発指定して二人分それにかける。無論

だめそうなの出してきたらやめるけど。
デーちゃんの判断は早い。
何がどうでそういう計算になるのかいつも聞きたいと思いたまに聞くのだが、計算じゃないし、計算でも説明ができないよと答えが返ってくる。
それにいつもうまくいくって訳じゃあないだろ。聞いても説明できてもしょうがないよ。右か左かって分かれ道なら誰でも判断くだすだろ。
特別、どっちかが破滅に直結する分かれ道って訳じゃないわけだし、つまりわからないうちはスピード重視。ただし一貫性をもつことでどんなに進んでも後には引ける。
だろって、デーちゃんかっこよすぎると思う。
とにもかくも、作戦は続いた。
２００万づつ出して買った株が２％上がったところで売った。
ジンクス　清美を抱いた日
でーちゃんには2度ねしたあさといってる
これはオレのルール。
オレはデーちゃんと清美と後は少しのものがあればいい。
わずらわしいのは嫌いだ。それはデーちゃんと同じ。清美のまじめさが好きだ。それはオレも同じ。

9.
左回り航路　時よもどれツアー

デーちゃんがハンドルを握り、助手席は麻里子ちゃん、オレと清美は後部座席でいちゃいちゃ。
デーちゃんがあれこれ目的地までの説明をしている。今日のデーち

ゃんは機嫌がいい。
それにつきると思った。天気は笑えるくらい大雨でそのせいかいつも渋滞する道のりもすんなり通過できていた。
清美が温泉に行きたいといいだして、麻里子ちゃんを誘ってデーちゃんもという流れだった。麻里子ちゃんは彼氏には女だけの旅行と言ってるらしいがそこのところはどうなんだろうと思った。
車内は安定した雰囲気でダブルデートみたいなのはデーちゃんは嫌いなのは知っていたが俺自身はそう悪くないのを知っていたので今のところは思惑通りかなと感じていた。
仕組んだのは清美だがこいつはもうそんなこと忘れたはしゃぎぶりだ。デーちゃんが女、怖いというのもこういうところみるとわかる気がする。まあ、オレは気にせず悪のりして忘れるんだろうけど。
清美と麻里子ちゃんが組んだ行き先は、昔、大ちゃんが住んでいたところらしく大ちゃんが運転をかってでた。そこから少し山奥にある温泉街の旅館で一泊。帰りは来た道をたどるんでなく少し遠回り、小京都とかいわれる街でさらに一泊してゆっくり帰りましょうという2泊3日の旅だった。

10.
ヒデ、悪い運転変わって。
ああいいよ
ログインするんだろ
ああ頼む。
高速に乗って最初のサービスエリアで休憩した。
仕事？
麻里が聞いてくる。
ああ。
ベンチに横並びに座る。

悪いねみっともなくてさ。
携帯を身をかがめていじってるなんてさ。
でも、これがオレの今の仕事。
ごめんな、旅行気分壊れるよね。
ううん。
麻里は黙ってそばにいてくれた。
オレが確認を終え立ち上がると一緒に車へ向かった。
わりい。
ヒデ頼むよ。
あいよ。
車はぶっ飛ばしながら道をまっすぐに進んだ。
高速をおり道はうねうね山の際を通る。
普段馴染みのない道にヒデ棒は興奮する。
いよいよ来たって感じね。
清美ちゃんと麻里もはしゃいでいる。
オレもそうだった。
何かしらどこかに向かっている気になっている。
温泉宿は混んでいて駐車場のスペースを見つけるのに苦労した。
中にはいると受付のカウンターには誰もおらずしばらく待った。
女性陣二人はおみやげのコーナーを眺めて回っている。
一見支配人らしき人がとうとうおくからやってきて相手をしてくれた。
すみませんすこし手が回らないものでと正直な回答に館内の賑わいにある程度の納得感はあった。廊下を歩いていると裏方の忙しさがかいま見える。かちゃかちゃ食器を運ぶ音になにやら指示を出している主任風の女性と新人風の２人。
きびきび廊下を歩く男性従業員。
みな、挨拶も忘れない。
大忙しで、それらが伝わってくる。それは多分だめなことなんだろうが、それほど感じが悪くはなかった。格調の高さや厳かさを求め

てきたわけではない。
部屋に通され日本風ってのもいいねえなんて話していた。
オレとヒデ棒はすぐに窓のわきの向かい合わせの籐いすで冷蔵庫の中からビールを取り出し乾杯した。
なにわともあれあれだわねと清美ちゃんがいい、麻里が私も飲もうかなといったので、じゃあ皆で乾杯しなくちゃねとなった。
４人が乾杯をしていると部屋に世話役らしき女性従業員が現れてあれこれ説明していった。
お風呂はどこどこで何時まで、夕食はお部屋にお持ちしましょうか云々。朝は何時で朝食は何階のどこそこでなどの説明。
部屋に食事を用意するなんてなかなか普通ではないのだろうにそれがこの館の売りなのだろう。みながいそがしいのがわかる気がした。
確かにありがたい試みで、それで廊下が忙しいのだ。
じゃあ、夕食は7時、それまで温泉にはいって朝は7時。８時半までには出発の予定を立てた。
旅費は男性陣もちだった。オレとヒデ棒が折半。オレらの仕事が順調な証だし稼ぎを使うってのはうれしいことだった。車は麻里の車。
清美ちゃんがプランを組んだ。
窓辺に座り携帯をいつものくせでいじろうとするとヒデ棒にしかられた。
仕事はここまで、デーちゃん終わり、終わりだよ。
さっきも、いおうと思ったけどこれで最後だからね。
わかった、わかった、最後に確認だけさせて、もうしないから。
なんかおかしい、もうしないからだって、子供みたい。
女性陣二人がやりとりを聞いていて笑っている。
ねー秀くんお茶飲む。
清美ちゃんが聞いていてビールの缶の残りを一息に飲み干してヒデ棒がおうと答える。
なんでも飲み干すなとあっけにとられる。
ヒデ棒と麻里が場所をチェンジする。

汝の対面に学べ。
ビール飲むか。
うん。といって麻里はオレからビールをもらう。
これさ、開けようとして、ぶしゅーってなったらどうする。
えっ。麻里の指が止まる。
こっちにしろよ。
もう一つビールを渡す。
えっなに。
といまもなくすり替える。
オレは自分の缶の残りをヒデ棒よろしく一気に飲み干して、もう一つの缶に手をかける。
せーので開けるよいいか。
顔を近づけて、
いい。
うん、いい。
せーの。
オレの缶はぶしゅうわーっと音を立てオレの顔に泡と苦みをまき散らした。
ヒデ。こら。お前。だからこんなことすんなよって言ってみた。
えっなによなに。オレ知らないよ、ちょっとまってよ、オレ知らないって。
そして皆がばたばたしてオレは目にビールがおもいっきりはいって目が赤く充血した。
オレは懺悔したかったんだよ、こんな風にしてさ、旅行もさ、本当はちょっと苦手だし。
清美ちゃんとヒデ棒がなにか企んでるのも見え見えだしさ。でもさ、だれも悪くないんだよね。麻里もヒデ棒も清美ちゃんも。
もちろんオレだってもさ。
こんな風にふっきるのも悪くない。
オレは麻里に顔やら頭やらを拭いてもらって変に笑ってた。

食事の前に風呂にはいろうということになって、オレとヒデ棒。麻里と清美ちゃんがペアでというか当然、混浴とかではないので男同士女同士で別れた。
デーちゃんこれからどうしよ。オレさ清美と結婚したいとおもってんだけどさ、どうなのかな。清美のお父さんてさB社の幹部だってさ。オレさ事実上無職みたいなもんだし、どうなんだろ。
オレが親だったら絶対に反対するな。
だよねえ、さすがにオレもそれはわかる。
だからさ、どうしよう、デーちゃん。
答えはだせなかった。
深刻な話しへの結論についてはなぜか考える気にもならなかった。
大事なことなのに。
大事なことについて判断がくだせないし、答え出せない。
わからんよ。
それしかいえなかった。
ごめん。
ごめん。この話しはこれで終わり。
デーちゃんが仕事持ち込むのと一緒。
さー今日は飲むぞー。
ヒデ棒はどこへ向けてかそういい、立ち上がってオレにけつを向けた。
けつを向けんなって。
オレはそういい、ヒデ棒の足を蹴ってやった。

ヒデ棒が出て行った露天でオレは一人湯につかっていた。
ヒデ棒はオレをすごいというが、あいつこそだ。
あいつは揺るがない、心は振れるが流されない。
オレは判断するが、牌を張っているのはいつもあいつだ。
あいつは人を信じれる。

清美ちゃんのことも、オレのことも。
清美ちゃんの気持ちがわかる気がした。
はじめてだ。ヒデ棒のこと、ヒデ棒の周りのことを考えるのは。
あいつは周りを幸せにしようと考える。オレはまず自分から始める。
ヒデ棒は違う。違う気がする。
これまでも考えてみれば違っていた。
あいつはそうだ、オレよりも先に、オレがセカンドから声かけられるより先に、幹部連中に話しがあったことを言ってたっけ。
祖父が地主で、A社とも何らかのつながりがあったとかないとか、父親もA社に関係していたらしいが、そんなことを言っていた。
ヒデ棒は単におもしろがって反骨を示していたんじゃない。
それはだれだ、清美ちゃんの為ではなく、オレの為でもあったのではないか。
ヒデ棒は家族の事を母親のことしか話さない。次は祖父で父親については無言だ。
オレはそのときずっと温泉にサウナよろしくどこまではいっていられるかにかこつけてヒデ棒の事について思いを巡らせていた。

その日の夜は、お酒がおいしかった。いつもは酔わないのに酔った。
何度もよった。その都度楽しかった。
皆が寝てしまい、そのことを振り返ると泣きそうになった。
静かで、寂しかった。
オレは一人、部屋を出て長い廊下を歩いた。
自動販売機が大きな音をたてた。ただ、冷たいお茶を買いたかっただけなのにひどかった。
温泉宿のロビーは誰もいなかったが、電気はついていた。ソファにうずまり眠りについた。片手に持ったお茶のペットボトルが手から離れたのが意識のなくなる合図だった。

１１。
旅から戻り、繰り返した。一発勝負の決心はつかぬまま、小銭は増していった。それ小銭じゃあないでしょうよと、ヒデ棒は叫ぶ。
こんなんコーラの缶がプットふくくらいの勢いだよ。
オレはひとりごちる。
ヒデ棒はやれる。
オレは信じていた。
妄信していた。
あいつは大物だ。
オレと違う。
あいつに踏ん切り尽かせないと。
オレの決定じゃあだめなんだ。
あいつが決めないとあいつを説得させないとだめだ。
あいつが勝つと判断したとき、それが勝負の時。
オレの目先の勝負じゃない。オレのは小銭だ。
ヒデ棒が煮え切らない。
オレは小銭を中銭にしてやる決意だった。だんだん戦線は厳しさを増し、小手先の技では通用しないようだった。
麻里からメールがありまた会いたいと事だった。
あまり会うのは良くないよななんてこの前別れた時話したような気がしたが、のこのこと出かけていった。
車の中でまっていると、ドアをノックされ知らない男がちょっとと言うのだった。
オレはドアをロックし無視を決め込んだ。車にエンジンをかけ出口を探した。
携帯が鳴る。麻里からで、オレは電話に出ると、男の声だった。感情を押し殺してますよと訴えている低いうなり声でオレの嫌いな犬のうなり声だった。
ファイブはお前といい。オレの女といい。オレは理解した。

ああ。ああだ。
そうだよねと思った。
オレは無視して帰ろうとした。
もう用はない、出口に向かってこの時をこの関係を断ち切る決意だった。
ああ行った。そう。でも、４人でだ。
何にもないよ、清美ちゃん知ってるだろう、麻里の友達だ。ヒデ棒も知ってるだろう、清美の男だよ。オレは車の運転手兼数あわせ兼案内人だよ。
じゃあな、と言いかけると待てよといい。
麻里が出た。
なんで、今どこにというまもなく
ごめんねといわれ、
何がというまもなく
ファイブに変わった。
車から出てこっちこい、
いいからこいよ。
それに麻里ってなんだよ、麻里子だ。お前、なにさまだ。
麻里がどうなってもいいんならな的な言い方はどうなんだろう、何でなんだろう。いいじゃないか、二人でよろしくやったんだろう。
やってきたんだろう、今更何を盛り上げるんだ。
だから、なんだよ、とオレは言葉に刺を持たせその刺激が自分にも向かい、はっきりしろよ、なんだってんだよお前。
と、のたまっていた。
今から麻里子とそこ行くからそこにいろよとファイブは電話を切った。
オレはエンジンを切りシートにうずくまりフロントガラスの正面もバックミラーもサイドミラーも見る気がしなかった。
オレの毛ほどもの神経を吹き飛ばしやがってまだ気が済まないんだ。
ずけずけとあとはいいだろう。お前の勝ちだよ。

ドアがノックされて麻里だった。ウインドを下げて警戒を解かないでいると、
ファイブが遠くに見えた。入っていいといわれ中に入れた。
で、なにが、なにを、したんんだろうとオレは言った。
麻里は何でか泣き出してオレには心底わからないことだった。
オレの小さな心はますます小さくなってしまった。
洪水だね。屋根があるのにやまないね。
で、車出せばいいの、とオレが言っていた。
オレは聞くべきじゃないんだろうにともう一人の俺が言っていた。
普段は無口なのに余計なときに余計なことをしゃべり出す。なんでか饒舌になる。さらされた本性のようなものと向き合わされ麻里とファイブと向き合い、ああオレの用意した逃げ道は使えない。
真っ白だよ、時が止まればいいのにと、シートにうずくまる。眠くなればいいのにそうもならない。空に雲がゆっくり形を変え動いていた。
ドアが空く音がしてごめんねといって麻里が出て行った。
笑顔を見せていた。
オレは動けず晴れた空を見ていた。
電話が鳴り、非通知にもかかわらず出るとファイブからで、もう二度と麻里子と会わないでくれとのことだった。ああ。といい、あれこれファイブと麻里の二人の間のこととか聞かされて、最後の最後に、お前最低だよなと、ぼそっと本当の事を本当に嫌いな奴に言われた。電話が切れて、ほんとにひとりぼっちに感じた。
頭ん中だけで二度携帯を二つにぶち割った。エンジンをぶんぶんふかして休憩所のトイレのガラスドアに車でつっこんだ。
そうして、ほんとに眠くなってきたのは幸いだった。
暗くなり。帰った。
いつもは連絡をよこす、ヒデ棒からのメールはなかった。それはしばらく続いた。
オレは最低だってことが広まったんだろうと思った。

じっくり考えなくともそうなのだ。
何をいまさらオレだけを暴かなくともよいのに、携帯は仕事専用になり数週間をすごした。
まったく、働いていた、人様並に働いていた。ファイブよりも働いていた。

数ケ月ぶりにヒデ棒がメールをよこし。会おうとのことだった。麻里の例があったのでイヤな気しかしなかった。
仕事やってると言い出し。仕事の話しならいいでしょうといいだした。
決めたよ、とのことだった。数百万の材は貯まっていた。
ヒデ棒が決めた。
じゃあ、会おうかといった。
まだうたがっていた。
これ以上、なにを切り離すものがあるというのか、ヒデ棒が最後の引導を渡すんならけりつけて、この街からも何からも出て一からどこかで始めようと思った。

12.
戸村さん、それでどうですか。
ヒデ棒から連絡が来てから戸村さんからも連絡があり先に戸村さんとあっていた。
順調だ。すべてうまくいくし実際順調だ。
この件に関して、お前の判断は間違っていない。
カウンターから街の人が行き交う様子を眺めながら話していた。
戸村さんがどんな人か聞くべきか、聞いたところで自分が信じられなければ一緒のような気がして黙っていた。
じゃあこの調子で進めます。

ああ、頼むよ。
何をやってる人なのだろう。
高校を卒業して実質無職の自分は、時間というものが余るくらいある。学校の時間というものがいかにうまくつくられていたかがよくわかる。
戸村さんは仕事している人には見えない、家族がいて子供がいてという風にも見えない。
金はあまっているのかも実際はわからない。
わからなくとも進むのが時間だし人生だし今の自分である気がしていたのでまずは礼を言うべきだろうとは感じていた。
甘いなと戸村さんは言ったがそれはコーヒーを飲んでのことだった。
次に人が行き交うのを見て、皆仕事さ、たいていのことは仕事をいいわけにできるもんだ。
といった。黙って聞いていた。
でもさ、そんなにたいしたことはないんだ。仕事も、たいていのやることも。
何が大事かわかるか。自分が何をしていてどんな効果があって誰のためになってるかわかってるってのが大事なことなんだよ。
戸村さんはこの甘いコーヒーに誓いでも立てるかのように飲み干していた。
どんな大事なことをいったかそのときによる。どんな大事なことを言われたり、聞き逃したりはその時の気分による。
オレは今の自分の仕事のことでいっぱいだった。
金を増やすことといっぱいで、それができるうちにとことんやり遂げようとしていた。
それで何になるのかもわからずにそうしようとしていた。
順調ですべてうまくいくのもわかっていた。
それはそうなのだ。
そうだからそうなのだ。
ただ、その後は知らない。

今はしらない。
戸村さんはしってんだろう。
ヒデ棒も実はしってんのかもしれない。
ともかく、今の勝ちを確定させ先を読み、明日と明後日、一ヶ月後くらいに杭を打ち込む。
戸村さんとはそのあたりにまた会うことで話を付けた。
ありがとうございます。
じゃあまたこの次。
と、挨拶して別れた。

13

明日の約束がないと起きてこれない日々を過ごしていた。
仲間が次々に死んでいく。見えないけれども戦争は続いている。
朝起きることからしてそうだ。で、夜に寝る。
やっと起きてきた朝、笑顔で会うと、俺に会うことと、大勝負をする事の二重の神妙な面持ちでヒデ棒は笑いもしなかった。
オレはヒデ棒の場にのまれ、いい具合に違いなっかった。まるっきり成功する流れでヒデ棒の本気に乗っかるだけだった。
これとこれとこれを選んで最終的にこれを選ぼうと思っているんだけどと説明があった。
選択されたこれとこれはなかなかの目の付け所だし、オレは自身では選びもしないだろうものだった。最後のこれも選んだ基準はわからなかった。
だが成功するのをしっていた。
じゃあ、早速今晩にでも買い付けとくよとヒデ棒と約束し、別れた。
それだけだった。
近況報告もなにも無しだった。
どちらがすべきともどちらもすべきとも思わない。

じゃあ、それで、また。で終わりだった。
オレは帰って仕事をして眠った。
直近の数ヶ月の生活を最低維持するくらいのお金を残してすべて投資した。
しばらく仕事から離れた。
小銭稼ぎもしない。
大口投資先の状況を日々見る誘惑に駆られないためだった。
しばらく、無職。のんきな身分だった。
しかしそういうのは寄せられるのだろう。宝くじで1等を当てた億万長者や文句ばっかいう友人やいつまでも眠らない子供。
どっからはじめたらいいんだろう。
スタート地点あるいは5歩も下がった気分。
しばらく眠った。
ベットの中でお腹がすくまでねむったり、頭痛がして眠られなくなるくらいまで眠った。
そして誰からも連絡がないということは、自分が連絡する番だと言うことに気づいた。
こっちの番が来ていたのだ。
うんざりするようなメールも、突発的でいいだしっぺなのにドタキャンしたり、とりとめのない長電話をしてみたり、役作りは可能だ。
ただ何だったんだろうと思う。
思いとか忘れてしまうものだ。
すっかりきえてしまう。
あれはなんだったんだ。
あの時代は何だ。
今に繋がる過去は何だ。

戸村さんと連絡を取った。
眠っている間いくつもの夢を見たが、
ああ、この夢はオレがみているんじゃあないぞと、戸村さんの夢だ

ったんだと気づいた。

１４．

むなしさはまだだよと戸村さんは言った。
お前はまだだよと戸村さんは言った。
オレのところに来るにはまだ早すぎるんだ。
お前は階段を上ってる。針を穴を通すくらいの道をたどっている。
時期たどり着くだろう。
だから、時期だ。
お前はたどり着くよ。
きっとな。
そんなことはわからない。
大事なもの一つ。
わからない。
考えるとだめだ。わからない。
行動すればいい。
それが勇気か、どうでもいい思いつきなのかもわからない。
無音。
無呼吸。
無意識。
今日を生き明日が来て景色を眺め、眠りにつく。
時間は残酷だ。何でオレをこんなにあきらめさせるんだろう。

あなたの知識と所有物だけを持って、いちからこの世界をやりなおしたいとするならば、どうだろう。
人が立ち上げた家々、塗り固めた道路、見たくないたくさんの人々。
それらが一挙に消滅して、一瞬の美しさに目を奪われるかもしれない。

その後、目を覚ませば、流れるものをとどめていたものは消え、自然の自然さが思うままに活動を始める。
麻里やヒデ棒の結婚のうわさを遠くに聞いた。
おれは金と結婚していた。
しばらく時はたったようだった。

15

最初は定めに抗い、次に定めを知り、定めを受け入れる。
定めを理解し、定めに自ら向かっていく。
そして、また抗うか。
汝はそれを知りつつ、足踏みをして、それもよいと考える。
一人歩み一人解決し誰よりも早く到達する。
他の人に偶然にも手を貸すことになる出会い。
他の人の自分のとは逆道にそれることになる同行を余儀なくされる回り道。
その逆もまたある。
理想を目指して進んでいくこと。
これが人生の定理だ。
いろんな定理を崩してきたが、今はこれが一番盤石だ。
智晃はであった若者を思った。自分にもあんな頃があった。まだ進むべき道があった。目標とする何物かがあったような気がしていたあの頃だ。
闇雲に働いていた。考えなどなかった。毎日を積み重ねた。
それが続くものだと思っていた。それはそれでよかったに違いない。
でもうすうす気づいていた不安がそっと忍び寄って形になった。
これはこれだ。
どんどん時がたっていく。自分はもう酔ってない。人を乗せた電車

が毎日通り過ぎていく。自分はどこにも向かっていないような気がする。訳もわからず文句を言いながら向かっていたのが正しく思える。
取り残されて、立ちつくす。
その間にも肉体は動いている、心臓は起動し脳は眠りすぎると警告を出す。
ばらばらだ。大輔という若者にそう助言した。かつての自分のようだった。
子供に毒を流し込むこと、美しき地球を汚すこと、生きることの力。
片足を曲げて壁にもたれ、斜に構えて煙草を吸う。
智晃は人は死ぬべきだと考える。
大輔はそれを止めようとするだろう。
あいつには止められてもいい気がしてしまう。
うつくしい自然を感じる心を失ってしまった。自然はもはやデジタルのデータで管理され箱の中の景色でしかない。
人間自体がＵＳＢ。
日本人になりたい。せめてベースを昔の日本に近づけたい。そこからまた外国を積み上げたい。まるでアメリカの建国のように、祖国のベースをもとにつくりあげる新しさ。
アメリカ大陸を探せ。

１６．

お恥ずかしいことに、望みはない。欲しいもの無し。金はある、時間はある。目は覚めている。それでなにを。
日本を見たい。日本をつくるのだ。
城を築けば日本か。そうではない。
日本語を話せば日本か。
そうではない。

こんな現在望んでいないし、未来もこうは望まない。
美しさがあったはずだ。
それらは今もあるが、場所的にも時間的にも気分的にも金額的にも点在しすぎている。
調和を図らねば。
だからだめなものはだめ。
まとめてやる。
隔離する。
いいものと悪いもの。悪いものがいいものに悪影響をあたえるのなら、削る。
削る。削る。
恥ずかしくていいことできないなら、削る、これは作業だ、業務で仕事だ。
仕事ならなんでもやる、みなそうだ。

毎日日々見る人を殺して、たどり着いた日本。ここからだ。血の歴史を土台にしてはじめてはじまる。そして見た夢がせいがんのゆめ。やがて夢を現実化するために。皆をこの夢に引き込むために。皆をドン底に落としたいと思うようになりました。

そうしたら突然いつも眠くなって夢をくっつけさせられるんだ。仰向けで魚に乗る話ししたっけか。
オレはここまでで、もう先へは進めないと思ってしまっている。朝、目が覚めて気分良く調子の良い日でも、数歩しか進めないのを知ってしまった。
そうして先は行き止まりかもしれない。
だとしたら今のままで、。

戸村さんの遺言にはそうありオレは事業を承継していた。
戸村さんの世界に色をつけてやる。戸村さんの日本に世界との架け橋をつなぐ。
そしてぼくも眠くなってやがてそんなものはどこにもなくなってしまう。
たしかにうつくしいものはあったのに。たしかにほんものはここにあるのに。

あなたの夢は？成し遂げたいことは？
美しさの中にありたい。そのなかで蝶のように舞っていたい。

ちっちゃな常識と慣習をぶち壊すすがすがしさが欲しい。
ふと、海の風を思い、なつかしき思い出に帰りたいときがある。
朝の海岸線を目指した。
地元の漁師さんくらいしか車を走らせていない。まだぜんぜん混雑しない道に車をはしらせた。
海を正面に車を止めるところに車を止める。なつかしの場所に懐かしの車が止まっていた。
ブレーキは間に合わず胸が痛んだ。
隣に麻里の車であろう車が止まっており、麻里が顔を埋め眠っているようだった。
朝の光がまだ弱いせいか麻里の懐かしの赤い車は色がくすんで見えた。
オレは車の外で出て軽くドアを閉めたつもりが、麻里を起こしてしまった。
こっちを見て止まった。
オレも見ているしかなかった。
そのときの時間は止まっているように感じた。
二人以外の時間が息苦しくて呼吸を我慢してくれているようだった。

動き始めた時が日の入りようの変化で風の息吹で自然の作用だった。
オレは防波堤に座り、麻里がでてくるのを待った。
後から思えば、昔とは逆な感じだと思った。
昔はオレの方が見られたくない現場をいつも抑えられていたのだ。
そしてしばしばオレは麻里から逃げた。
麻里もそうしてくれてもかまわない。
それで終わりでもともと終わっていて今日はなにかのひょうしのたまたまだ。何か昔の忘れ物があったんだろう。
麻里が出てきたドアの音で目覚めた。
どうしているの。といわれてもどうしてだろうと答えるつもりだった。
久しぶり。といわれると久しぶりと返した。
人は過去に引っぱられている。
だまっていてもそうだけど未来に進まなければいけないと思う。
元気とオレがいうと、まあまあかんと声が帰ってきた。
麻里を見た。
なにしてんの、ということばが下がった。
こんな時間にこんなところで。
普通じゃない。
ちょっとみせろよ、腕のところの痣。ほほのはれ。どうした、どうしたんだ。
オレは腕を取った。関係ないはずなのにすぐつながった。
ファイブか、あいつか、あいつがやったんだろう。
オレはいきり立った。
おい、きいてるのか、麻里、大丈夫か。
オレはこのために来たのではなかった。ただの朝のドライブだった。
自動販売機でお茶を買って帰るだけだった。
麻里。
オレはヒデ棒に電話をかけた、躊躇などなかった。
おう、ごめん、今、麻里と会ってる。

なんか聞いてる、清美ちゃんは今そこいる。
詳しい話聞かせて。
久しぶりも何も、オレのテンションの高さに圧倒されてヒデ棒は良く答えることができないでいるのだった。
かろうじて、清美にあとで聞いて電話すると言うこと、A会社が経営悪化による大規模なリストラをするということ。会社は違うけど系列のB社に同級生のTがいるのでそいつの携帯の番号。などの情報を得た。
なるほど、なにがなるほどかわからないが、オレはそう言っていて、わかった、また、といい電話を切った。
話しているうちに熱くなってきて、穏やかな海がのろのろしてわずらわしかった。
麻里の手を取り振り向いてオレの車に乗せた。麻里の車からバックやらなにやらを勝手に引っ張り出してきて、他に大事なものとかないと聞いていた声がしていて、ドアが閉まり、車が動き出した。
麻里はえっえっとしてオレにたして震えていた。
オレは何に怒っているのか、かっかしていた。
麻里がそっとねえ大ちゃんと言いかけるそぶりを無視して気を張って車を運転した。
本当はずっとこうしたかったのかもしれない。どこかでやってしまうのを待っていたのかもしれない。
車を止めてからも落ち着け落ち着けと自分に言い聞かせながら麻里の手首をつかんで離さなかった。
ヒデ棒からか清美ちゃんからか電話が鳴っていたが出ることができなかった。
ねえ、どうしたのよ、大ちゃん、何か言ってよ。
麻里が泣き出してそれでもいらだちと怒りはなかなか消えることはなかった。
ねえ、ねえ、つかまれた手とは反対の手で肩を揺すぶられ、我にかえったが、オレはあの野郎、ファイブめ、くそ、野郎。

オレは麻里を見てもいなかった。
オレがぶっ殺してやる。
麻里など見ていなかった。
ここにいろよ、いいな、これ鍵、
オレがこれからなしつけてくる。
掴んだ手首をようやく離して鍵をもたせ、部屋にうながす。
麻里は車の外に出て立ちつくしていた。
オレはそれをミラー越しに見て、車をまたきた方向に走らせた。

ヒデ棒からの電話が何件か会ったが、頭が整理できず、まずは最初にヒデ棒から聞いた同級生だかに電話を入れた。
かろうじて朝のそれなりの時間だったので、相手は電話に出た。
簡単に用件を伝えて、話を聞いた。
ごめん、ありがとう。また、なにかあったら教えて、すこし落ち着いてきた。
次はヒデ棒。
いつぶりだろう。朝にかけていたがそのときはそれどころではなかった。
いまは少し実感があり、緊張する。
何度かコールして清美ちゃんが出た。
大輔君、どうしたの、久しぶりだけど、あと麻里子といるってどういうこと。
そうこうしているうちに、ヒデ棒に変わった。
デーちゃん。
ごめん、朝は、急に。
オレはそこまでしか言えず、
ヒデ棒が後をついだ。
万事了解済みみたいに、いろいろ情報を仕入れてくれていた。
ありがたかった。

デーちゃん、今こっちむかってるんでしょ、一回うち寄って、約束して、オレも行くから、デーちゃん一緒だよ。
わかった。ありがとう。電話する。
車は再び動き出した。

会社の正面に車を横付けして入っていった。
車を検査する門番には会社の何々の身内で不幸があって急ぎなんですと答えていた。
社内の受付嬢にファイブの名を告げ、取り次いでもらうが休んでいるとのこと、ヒデ棒から聞いた勇二さんの名を告げた。
セカンドさんか、。
どんな人だったか、呼び出してくれて今来ますとのことだったが、あれ実際なにをその人が関係しているのか、考えないでもなかった。
セカンドさんは部下らしき取り巻きを後ろに従えてきたが、オレを確認すると何かいい一人で歩いてきた。
たしか、大輔君だっけ、久しぶりだね。
スマートな対応で、ロビーのソファに二人向き合って座った。
健司に会いに来たんだって、健司は今、ちょっと大変でね、静養中だよ。
まあ、オレも仕事でね少し忙しくしているんで、あまり時間はとれないんだ。
何かあった。
セカンドさんは聞いてくる。
その健司ってやつの彼女の事で、彼女と今朝偶然会って彼女、
オレがうまくいえないでいると、
浮気とかはあるかもな、それくらい男だしわかるだろ、それに本気じゃないって健司その子にかなり前からほれてんだし、確か近く結婚するみたいな事も聞いてるんだ。
だから、そっとしておいてほしいんだ。
そうじゃない。

彼女、怪我してた。腕をみた、痣になってた。一つじゃない、今回だけじゃない、何かあるんだ、それをやったのはファイブだ。
オレはファイブと言ってしまったが、それにはセカンドさんはふれず、そっちの話しかと少し体の向きを変えてオレに向かった。
そうか、と言ったきりしばらく黙った。
それで、君は彼女の何、関係は、彼女のこと好きなの。
これ以上聞くのもどうかと思うから言わないけど、君はどうしたいの、健司はさっきも少し話したけどしばらく会社を休んでいる。自宅で彼女とゆっくりさせるつもりだった。
喧嘩でもしたんだろう、理由はしらない。
それについて、オレはとやかく言わない。
君は言う。
どうするかは、君が決める。
健司の家わかるか、セカンドさんはオレにファイブの住所と携帯の番号を教えてくれた。
ああ、後、オレのも一応入れておけとセカンドさんはそういって仕事に戻った。
いろいろ、話したいけど、それどころじゃないみたいだから、また今度。そういっていた。
いつでもそんな感じのように感じて会社を後にした。

ヒデ棒からの電話が鳴る。
ごめん。出るなり言い、今、勇二さんと会った。ありがとヒデ棒。
うん。
ごめん、
これから、うん、わかった、じゃあ、そこで、あっ清美ちゃんもこれたら、麻里の車、おいとけないし、どこか、うん、ごめん、頼む。
ああっ、ちょつと待って、清美ちゃんに麻里に電話するように頼んで、オレ急に朝、ひどいことしたかもしれないし、うん、ごめん。
じゃあ。

オレは残念ながら待ち合わせの場所へは直接は向かわなかった。
ファイブの家を攻めた。少し気持ちが和らいでいた。ファイブと戦う気力を取り戻そうとしていた。
ヒデ棒には悪いがファイブとなしつけてからだ。
ドアが開いている。入っていくと、麻里と間違われた。
酒臭い。缶ビールやら、酒瓶やらが散乱している。
麻里子か、とファイブが言いオレはそれには答えず部屋に入っていった。
お前は誰だと、ファイブが言った。
オレか、オレは麻里の男だ。
お前は誰だ、オレは言い返した。
ファイブは酔っていた。わからなかった。
お前は誰だ。オレはもう一度いい、ファイブは混乱していた。
オレの麻里になにしてんだよと、オレは言った。
あ、麻里、麻里子。
大輔かお前。ファイブはやっと気づいた。
おい、と膝をついて立ち上がろうとしているようだがうまくいかない。
オレは起き上がろうとしているファイブの胸を突いた。
ファイブは布団に横になる。
そこで寝てんのかお前。
酒飲んで床に敷いた布団で寝て、起きて、また飲んで。
ファイブが弱っていて話しにならなかったが、つけ込んだ。
オレのこと覚えてるよな、大輔だ。
お前の麻里子はいなくなった。
今日で終わりだ。
夢を見ろよ、飲んで寝て、また飲んで、夢を見ろ。
麻里子はいないんだよ。
オレは言った。ファイブはぐだぐだだった。あーとかうーとかしかいわなくなった。

オレはかえった、背中を警戒する必要もなかった。
ドアが閉まり、そのドアをオレも麻里ももう二度とくぐらないのだ。

ヒデ棒と清美ちゃんが待っていた海岸線にはわずかしか遅れなかった。
清美ちゃんが先に戻り、オレのアパートに麻里を介抱しにいくという。
ヒデ棒とオレはヒデ棒のアパートに戻ることにした。
セカンドの勇二さんからで、今日の夜、会えないかとのことだった、ヒデ棒に勇二さんからというとオレも行くとのこと、オレとヒデ棒は夜の約束をしてオレのアパートに向かった。

ちょっと麻里子になにしたのよ、清美ちゃんがオレにいいよる。したのはファイブだと言っても聞かない。違う、大輔君、ひどいよ。わかってない。
そう、わからない、オレはヒデ棒とその場を去った。
麻里子は私としばらくいるから、大輔君はヒデ棒といて、と部屋を交換させられた。
オレとヒデ棒、清美ちゃんと麻里が暮らすのだそうだ。
いいよねと、すっかり清美ちゃんのしきりに圧倒された。

で、ヒデ棒、久しぶりだな。つもる話しはあったが、とりあえずは夜の仕事をおえてからだなと二人して思っていた。

とある居酒屋で名前は猿丸、会社御用達には見えない。が、店は貸し切りだった。
昔さ、ここでバイトしてたときがあってさ、親父さんとは知り合いだし、借りたとセカンドの勇二さんは入って、カウンターにオレとヒデ棒を座らせて自分は板場で焼き物やら刺身やらを仕上げていっ

た。
健司も時期来るからさ、酔わない程度に飲んで食べててよ。
健司ってファイブかとヒデ棒が聞いてきてああとオレはいった。
勇二さんが言うと好い人っほくきこえるんだよなと小声で返してくる。

その健司がやってきた。がらっと扉が開き、カウンターに倒れるように腰掛けようとするのを勇二さんが留める。
健司、今日はあっちだと奥の座敷を指し、もの運ぶのお前も手伝えとこしらえた皿盛りを手渡す。
落とすなよといい、ファイブはオレらを見る暇もなかった。
準備ができたと、勇二さんがいい、オレ店の戸を閉めるからあそこいっといてと、奥の座敷を指さした。
ファイブが一人座っていた。
オレがファイブと向き合いヒデ棒の向かいにセカンドが座った。
まずわさ、と勇二さんが取り仕切り乾杯をした。ファイブだけは水だった。
いろいろあったし、いきちがいはあるけどさ、区切りつけようと思って今日はここに呼んだ。
勇二さんはというかセカンドしか話す人がいないようだった。
ファイブは黙って下を向いていた。
まず、こいつが悪かった、といってファイブにおいと声をかけた。
ファイブは下を向いたまますみませんでしたと言った。
その言葉がおわってから、オレもいろいろと迷惑をかけた。と勇二さんが頭を下げた。
えっええ勇二さんは何も関係ないですよとヒデ棒が言い出したが、勇二さんは続けた。
いろいろあってさ。オレも、こいつも。
会社って奴は化け物で、仕事ってのもそうだ。
言っちゃあ悪いがオレらは高いレベルで仕事をしている。ここの誰

よりもだ。
そういうのもそうみせるもの仕事の内、こういうのわかるか。うちの社長の車見たことあるか、うん千万だよ、部長も次長も課長もみなそれなりの車乗ってる。ビカビカのやつさ。オレのも見たことあるか、それなりだよ、で、どう思う、くそったれだよな、思うやつは思う。これも仕事の内。オレはさおもしろい車とか乗りたいよ、でも乗らない。これも仕事の内。公私混同はいけません、でも仕事に繋がるなら仕事優先。
オレらはそういうところに生きている。生きていた。
時々オレらを動かしてるのはなんなんだと思うよ。給与明細見たって書いていない。
嫁の顔にも書いてない。自分で判断下したってたかがしれている。
だから仕事を続けるしかないんだ。どこまでも。
でもオレらはいい方だ。まだ、。ただ、オレらがやり過ぎたのかすかしていたのか評価されたのかわわからない。こいつ、健司が配置換えで異動になった。異例の昇進だった。
最初はうれしかったしよろこんだよ、お祝いもした。オレらの仕事の成果ってやつかとも思った。
オレも自慢じゃあないが係の班長みたいな役になってさ、忙しかったよ。
そんときは今もだけど会社は経営難でさ、いろいろ上が毎日のように会議してたのを覚えてる。
会議で決まる事ってのは社内報だったり事前にメールなりで来るんだけど大抵ろくなもんじゃない。
今の仕事に何か追加しつつ、報告の数が増え、やってはいけないことが増えていく。人と給与は増えないままだ。
あれは何なんだろうな、ふるいにかけてんのか、挑発しているのかわからない。
煎ってはじけてフライパンから飛んでいくごま。
って言ってもわからないか。

お互いがこすれ合ってきづつけ合って、黙っていても熱いんだ。少しのきずが命取りになるし、ひどいもんさ。
でもそれで家族をやしなってんだ、家族があるやつは特に抜けられない。会社はとにかくはやく結婚させたがるんだ。そして子供の誕生を祝う。
そして終わりだ、福祉を充実させているんだ。退職後の年金も心配ない、家も土地も、なにもかも会社にまかせておけば心配ないんだ。仕事に専念できるようにだ。
社内でどれだけうまく立ち回れるかこれにかけているやつもいるよ。そいつは家に帰れないけどね。
まあ、ここまではいろんなやつがいるって事だ。そしてオレらの仕事も半端ないって事。
で、健司だ。
健司はいわゆるリストラ係にまわされた。だれもやりたくない仕事だな。
健司は良くやったよ。
実際成果あげたのは健司だけだったしな。
仕事っていったって早期退職の人員を勧誘するくらいさ、みなやることのたてまえはな。
健司は違ったんだ。
健司。オレは聞いてんぜ。お前がんばったんだってな。

戸村の野郎。ファイブがはじめて口をきいた。
戸村。戸村。
オレはぴんと来た。
あのおっさんだ。
ヒデ棒はまだ気がつかない。
ファイブが言うには戸村さんは結構なお偉ら方だったらしい。
上にも口が聞け下の面倒にも好い噂の人物で、ファイブもその噂を

聴きつけ、最初に相談に行ったらしい。
順調だったらしい。早期退職の希望者を募ったあたりまでは。
しかし、会社としてはそれではすまなかった。ファイブは通常の仕事をしたばかりだと揶揄された。
戸村さんは人を切ることがリストラではないという意見だった。
ファイブの上司は人を切ることが一番手っ取り早いという人物だった。
ただし、表向きはそうは言わない。表にも出てこない。私は申し訳ないがしらない。専任の担当者がおりそのものが一手に引き受けている。私は担当外なので。
ファイブは人身御供でさらし者だった。
皆、次の異動を恐れた、自ら辞めるか、病気になるか。
そこにはある程度の若手でじゃまなやつがいかされるという。
捨て駒の配置だった。
結婚して家庭を持ち土地を買い家を建て、会社に忠誠を誓う。そうしたものはいかなくとも良いとも噂された。
若い者でもすぐに結婚する。
ファイブはたまたまだった、麻里と結婚をする計画もあったらしい。
その事を異動前に上の上に訴えたのだが、返ってきたのは、まずは1年がんばれ。
という返事だった。
ファイブは1年がんばったが、成果が上がらないと言うことで更に1年と繰り返された。
戸村さんは代々のリストラ係の担当を影で手助けしてきた一般職の人間だったらしいが、裏を返せばいわゆる人切りをさせないための防波堤だった。
リストラが進まないのは戸村みたいな人間がいるからだと、ファイブの上司は言い。戸村さんは本当の問題は別にあると裏で別の情報を探っているらしかった。それまで待てとファイブは戸村さんに言われていたらしい。

だが、戸村の野郎に変わった。
ファイブはファイブの上司についた。
それだけだ。
上司から提案されたらしい、うまくいけば転勤できると。
だが、上司にも戸村さんにも結果踊らされた。
戸村さんは会社を辞めたが、ファイブは未だ現場から動けない。
ファイブはノイローゼになり、酒にはしった。
ファイブは戸村さんを敵にすることで生きてきたが、敵はいない。

１００。
オレいってくるからさ、ヒデ少し待っててよ。
安い、時に望みは４１４円で叶う。あるいて5分のスーパーに半分酔っぱらいながら、のこりの半分を酔っぱらうためにつまみを買いに出ればわかる。
その明細をゴミ箱に捨て、歩いて帰った。幸せだった。月は出ていた。おぼろげに、夜風は冷たくなく、ほろ酔いの気分は最高だった。今宵のつまみと、明日の朝の食料と水を買い込み、デザートもついた。
ものは寂しさの集まり。寂しさをため込んで費やす。寂しい骸に仮の服を着せる。
自分の把握する世界でどこにいてどうするか。
どこかにむかっているつもり、みたいなのもいいかもしれない。つもり、だしさ。

ああ、そう。仰向けに寝ていてさ、ねるっていっても目を閉じている状態のそれじゃあなくて、半分まどろんでいるっていうか休んでる状態。
で、そのときに、美女がきて、上に乗ってきてもたれかかられるしあわせ。

いまいったのは比喩でもいい。
美女のような風だったり、声だったり、連絡だったりね。
たとえば、朝7時だよ、おきなさいの目覚ましがそうであったら最高だ。

オレはそういう時を待っている。待ってきたんだ。
探してきたんだ。

やわらかくていいにおいで、美しいものをまもるんだ。美しいものをつくるんだ。

月が黒い夜に金の粉を播いている。
皆自分の持ち分でしか勝ったり負けたりする。だから人の夢を見る。
人と夢を見る。
夢をつなげたり、大きくしたり、小さくしたり。
ソースをかけたり、暖めたり、冷たくしたり。
朝に食べたり、夜に食べたり、おかわりしたりする。

来週麻里ちゃんの誕生日だから、その時だね。
その時っていう言い訳はもう通じない。
それを機会にヒデ棒と清美、オレと麻里の生活になる。
その日、麻里が来てオレとテーブルの前で向き合った。

（ラスと）１１７

この蟻を見ろよ。自分より数倍でかい山を登って谷をくだる。すご

いだろ、おもしろいよな。木の葉に浮かべたボートで大海を渡ってる。波が来た。すごい足をみろよ、踏ん張ってる。オレが何が言いたいかわかるか。
風が気持ちいい。あの青い色綺麗だ。昨日と違うよきっと、5分後も違う。その5分間の変化もまた楽しめる。
遊園地とか行きたいか。人のうじゃうじゃいるショッピングモールとか。そんなの望んじゃいないオレは。
だからオレはこっちにいる。もっとも皆がここに来たら迷惑だけどね。あっちに向かう人がいるのも事実だし楽しみ方はあちらはあちらである。
ただ、オレはこっち。オレはこっちを守るし、作るし、望んでる。
麻里子、オレとさこっちの方こいよ。
いいことばかりじゃあないけどさ。お前、こっちの方がいい気がするよ。もういいだろ。
オレさ、ずっと怖かったけどこっちに決めたんだ。
勇気がなかったんだよ、そっちの方もこっちの方もずっと見ていることに。
だから、うろうろしてたんだ。境界であっちむいたりこっちむいたり。
でもさ、今は違う。
アパートだけど家もあるし、仕事も何とか、貯金もあるんだ。これからもこのままやっていくんだ。
でもさ、でも、不安はあって、麻里子の弱いとこで、つけ込むような感じもするけど、寂しくて、でもやっていくことは決めてやっていけるんだ、けど、麻里子がいてくれたらうれしい。
オレをさ、助けて欲しい。オレがこっちでやっていくために、オレさ、麻里子がいいんだ。だれでもなくてさ。麻里子。
オレと来て欲しい。

そうやって大輔君は私に言い、私の目をまっすぐに見て動かなかった。

私はいろいろな言葉が聞こえてきたのは知っていた。それらのすべてを理解することはできなかった。正直自分の気持ちしか、わからなかった。でも、うれしくてうれしくてただただこれから大輔君と行くんだと言うことだけを理解して返事も何もなくて涙が出てきて、大輔君が私を抱きしめてくれたのを覚えていた。

FIN

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0481h/

yumenoboueisen

2010年12月13日21時54分発行